「令和の巡礼旅行」

私が聖書を読み始めたのは、今から15年ほど前のことだった。通勤や昼休憩など、仕事の合間に読むことが日課となっていた。そして出張に行く時の新幹線や飛行機の中、長野県の祖父母の家に出かける高速バスなど、旅をする時は常に聖書を読んでいた。

聖書に描かれていたものは、人々の暮らしの中にある苦しみや束縛、権力や富への執着と争いなど、ドロドロした内容が多かった。特に旧約聖書の士師記など、生々しい描写が印象的だ。それらの苦しみや現実は、社会人となって会社で働くことを通して経験する束縛や理不尽、毎日の長時間の拘束、日々の虚しさと重ね合わせて、はじめてその意味が理解できるように思えた。エジプトで囚われの身として労働につくイスラエルの民の姿が、東京で会社員として勤める自分の姿と重なった。聖書のエピソードの一つ一つが、自分の心を型作ってきた象徴的なものだった。

4年前にはじめてエルサレムに訪れた時は、不思議な感覚だった。何年も読み続けた世界、知り尽くした世界が、突然に現実となって自分の前に現れた。それは子供の頃にテレビの中の東京に憧れていた自分が、大人になって上京した時の感覚にも似ていた。初めて来るのに、何もかも知っていた。

エルサレムに着いた私はガイドもつけずに、ゲッセマネに向かった。夕方で時間外のため中に入ることができなかったが、柵を通して見えるのは紛れもないゲッセマネの園だった。見上げるとオリーブ山が一面に広がっていた。

翌日はバスのツアーに申し込み、カファルナウム、ガリラヤ湖、ナザレを回った。ナザレから少しバスに乗ると、カナの街を通った。ガリラヤ湖の周辺をバスで走っていると、取り憑かれた豚の群れが崖から湖に落ちていった現場もあった。翌日はベツレヘム、また少しバスに乗ってエリコの街にも訪れた。イエスが悪魔の試練にあった誘惑の山を登った。山のかけらやガリラヤ湖の小石、ヨルダン川の水をペットボトルに汲んで持って帰ってきた。岩や石や水がお土産となり、宝物になった。

最終日にはもう時間がなかったが、せっかくエルサレムまで来たからどうしても行っておきたい場所があった。寝ている場合ではなかった。朝の3時にシャワーを浴びて、まだ外が暗いうちに宿をチェックアウトして、スーツケースを引きずりながら聖墳墓教会を目指して歩いた。誰もいない早朝のエルサレムの旧市街は、まるで映画の撮影現場のようだった。重たい荷物を引きずりながら道に迷い、歩き回った。その時、十字架を背負わされて歩いたイエスのことを思った。午前5時頃、なんとかたどり着いた。イエスの十字架があったとされる場所の前にしばらく立っていると、何かの到達点を感じた。37歳の誕生日の前日のことだった。